

# 遊興のまちであった藤沢宿



八柳 修之

藤沢宿は東海道の江戸日本橋から数えて6番目の宿場。慶長6年(1601)に駅制が定めらるにあたって藤沢宿として整備、成立した。藤沢宿の戸数・人口が確認できる最も早い時期は、寛政10年(1798)、当時の軒数は808戸、人口は3,384人である。宿場は伝馬により人や荷物の輸送をするだけでなく、旅行者の休息の場であった。一般の武士や庶民が宿泊する施設には食事を提供する旅籠屋と、旅人が自炊する木賃宿、休憩する茶屋もあった。旅籠の数を調べてみると、享和3年(1803)49軒、文政3年(1820)48軒、天保元年(1830)51軒、天保14年(1843)が45軒というように、ほぼ45~50軒程度であった。他の宿場と比較するとどうであったか。天保14年(1843)の「東海道宿大概帳」という資料がある。これによると、藤沢宿には45軒の旅籠があった。大鋸町・大久保町の南方の旅籠町が中心であった。旅籠屋の多くは畳数20~30畳ほど、部屋数3~4室程、旅人の多くは相部屋であった。

東海道宿大概帳(天保14年・1843)に見る宿駅の旅籠数

宿名	江戸からの距離 km	宿人口 人	宿内軒数 軒	うち旅籠数 軒	宿内軒数に占める旅籠 %
川崎宿	17.6	2433	541	72	13.3
神奈川宿	27.3	5,793	1,341	58	4.3
保土ヶ谷宿	32.2	2,928	558	67	12.0
戸塚宿	41.0	2,906	613	75	12.2
<b>藤沢宿</b>	<b>48.8</b>	<b>4,089</b>	<b>919</b>	<b>45</b>	<b>4.9</b>
平塚宿	62.4	2,114	443	54	12.1
大磯宿	65.4	3,056	676	66	9.7
小田原宿	81.0	5,404	1,542	95	6.2
箱根宿	97.4	844	197	36	18.3

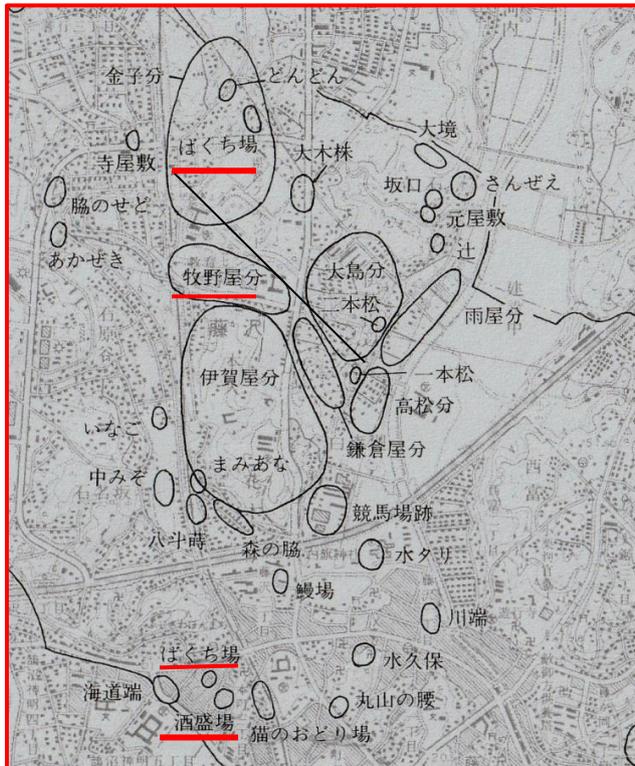
上表を見るに藤沢宿は東海道、大山道、江ノ島道、八王子街道が交差する交通の要路であるにしては旅人を泊める旅籠数は45宿、他の宿場に比べて少ない。宿内の軒数(戸数)に占める旅籠の数は4.9%。宿内軒数に占める旅籠数は神奈川宿に次いで少ない。

宿場町、人が集まる所、泊まる所とあらば呑む、打つ、買うがつきものである。

呑む、先ずは酒である。江戸時代、幕府は酒株制度を設け酒株を持つ者に酒造りを許可した。この制度は明治8年(1875)まで続いた。酒株を持つことが出来たのは地元有力者、資金力がある者に限られた。藤沢宿代官を務めた江川太郎左衛門家は鎌倉時代に大和国から伊豆韮山に移住して酒造りを始めた。藤沢宿内の造り酒屋の嚆矢は坂戸の間屋場を務め、北条氏に仕えた元士族の牧野屋(寅さんこと平野武宏さんのご実家)である。当時の酒は濁酒であったが、やがて清酒の技法が伝わり上方から日野屋、近江屋、キノ勘、三河屋、伊勢屋などの出店が進出し定住するようになり宿内の有力商人となっていった。

時代は飛んで、酒造りは大正8年(1919)、伊丹の白雪で知られる小西新衛門らが大庭に大日本造造(株)を設立、やがて合成酒「理研酒」へと発展、さらにメルシャンに受け継がれていった。

打つ＝賭博であるが、これは宿内（江戸方見付から京方見付の範囲）では営業できないアンダーグラウンドの商売、カジノは東西どこでもセンターから離れた所にある。ではどこに賭場はあったのだろうか。「藤沢の地名」（下図）をみると、金子分の中にばくち場、鶴沼神明四、湘南高校の辺りにもばくち場、酒盛場が見いだせる。金子分と伊賀屋分の間に牧野屋分が示されているが、これは地主の持ち分を示したもので、牧野屋分は前記平野さんの分であった。



川岸町（現藤沢 692）にあった中島屋角田商店。大正 14, 15 年頃の撮影の写真  
看板には優等清酒 神聖 京都伏見 山本源兵衛とある。ガラス越しに撮ったので不鮮明です。

買う＝女。旅籠屋には飯盛女（表向き給仕する女）を置かない平旅籠もあったが、多くは飯盛女を置き売春を前提に旅籠屋に抱えられていた。幕府は公認の遊郭（江戸の吉原、京都の島原）以外に遊女を置くことを禁じたが、飯盛女は遊女と区別されその存在は黙認されていたが、享保和 3 年（1718）幕府は、旅籠屋には飯盛女を 2 人以上は置かないと規制。その後、再三注意したが、文政 8 年、藤沢宿など 5 宿は関東向取締役へさらに誓約している。衣類は木綿以外は着用させない。旅人を勧誘したり、多額の金銭を要求しない。宿内の者、助郷人足、近在の者は宿泊させない。藤沢宿には江戸表、近在から江ノ島に参詣に来る者が多いが食売女（飯盛女）を先々まで遣わして出迎えしない等 10 カ条を提出した。天保 6 年（1835）当時、旅籠屋 45 軒うち、27～28 軒が飯盛旅籠屋であったとされ 56 人の飯盛女いたと計算されるが、実際は家事手伝い、子守などの名目で 2 倍位、100 人程度の飯盛女がいたとされている。



夕暮時、遊行寺橋付近くで客引きする女が見られる



東海道中膝栗毛、藤沢宿での弥次喜多

明治になると 11 年 (1878) の藤沢町の人口は、世帯数 1,196 戸、人口 5,789 人 (男性 2,870 人、女性 2,919 人) となっていた。職業別統計によると娼妓は 54 人 (うち大久保町 43 人) である。明治 20 年 (1887) 東海道線横浜・国府津間に鉄道が開通し藤沢駅ができると、いわゆる三業地が駅周辺に出来、宿場は廃れていった。旅籠屋は割烹旅館と遊郭とに分離され、遊郭は 10 軒、芸妓屋が 14 軒あった。明治 10 年公娼の花柳病治療のため県立病院が某所に設置された

「東海道中膝栗毛」(享和 2 年 (1802) に初刷された十返舎一九の滑稽本、主人公の弥次郎兵衛と喜八が描かれており、この絵をみると、弥次喜多が旅籠で飯盛女を揚げて酒宴に興じている。踊りではなく狐拳 (きつねけん) というじゃんけんである。狐派は獵師に鉄砲で撃たれ、獵師は庄屋に頭が上がらず、庄屋は狐に化かされるという三すくみの関係を動作で勝負する遊びで、子供の頃遊んだメンコには表示されていた。さて本題、この作品の中には次のように藤沢の情景が描かれている。

ふじ沢のしゆくへはいると、両がはの茶や、口をそろへて、ちやや女「お休みなさいやアし。酔ないさけもどざりやアし」 馬かた「だんな生きた馬はどふだ。やすくやりませう。馬は達者だ。はねることはうけ合いだ」 かごかき「かごよしかの。だんな戻籠だ。やすくいきまじやう」(中略) 弥「コウ貴様たちやア藤沢か。アノ宿も大分きれいになったの。問屋の太郎左衛門どのは達者かの」 さきぼう「よくだんなはしってござる。随分たつしゃでいられます」 弥「孫七どのは、まだ勤めているかの」 さき「アイサア、だんなはなんでもあかるいもんだ」(以下略)

茶屋の女の客引きや、馬方、駕籠かきと相対で運賃を決めている当時の宿場町の風景が想像できる。物語全体はフィクションであるとされているが、十返舎一九は藤沢まで来たのではないかと言われている。実名と思われる問屋の太郎左衛門と孫七の存在である。

「藤沢沿革考」に以下の記述があるという。文化 6 年 (1809) から天保 6 年 (1835) までは坂戸町の問屋は平野信蔵が務めたことになっており太郎左衛門の名はない。しかし平野新蔵とは平野道治の事で、藤沢宿の地誌「鶏肋温故」(けいろくおんこ) の著者でもある。新蔵こと道治は嘉永 2 年 (1849) に亡くなっており、常光寺の過去帳には孫七父平野新蔵の事とあるそうだ。享和 3 年 (1803) 当時、平野屋孫七は総畳数 58 畳、63 坪を有し渡辺華山も宿泊し、華山はこの時の様子を旅日記「遊相日記」の中に「ひらのや」での朝食風景をスケッチしているという。この「ひらのや」が平野武宏さんのご先祖であるかどうか。おそらく平野武宏さんの菩提寺は大庭の宗賢院と聞くので、平野鎌倉屋平野雅道さん(郷土史家)のご先祖であろう。 完

#### 参考・引用資料

「東海道藤沢宿」三浦俊明 藤沢文庫 名著出版 「藤沢市史」第 6 巻  
「藤沢郷土史」加藤徳衛門 図書刊行会 明治時代の藤沢の遊郭について詳しい。  
「藤沢の地名」日本地名研究所編 名著出版 「藤沢わがまちのあゆみ」児玉幸多編 藤沢文書館  
小西酒造、メルシャンHP